

「自分でやってみよう；オートキャドを会得しよう」雑感PDF

AA：最初にオートキャドに出会ったのは、エンジニアリング会社で勤務した時でした。オートキャド以前は、ドラフターを使用し、鉛筆で図面を描いていました。ブラジルに出張した時、或る会社では、おびただしい数のドラフターが広い部屋（図面室）の片隅に追いやられていました。マネージャーが「これからはパソコンで図面を描く」とおっしゃっていた。

BB：学生時代は機械設計図面を、墨（烏口）を使って描く訓練をしました。卒論図面はポンプの軸設計図面（鉛筆）だったと記憶しています。

CC：会社に入ってから、簡単な道具、作業具、修理図面などを描いてきました。主として、機械配置のレイアウトを鉛筆で描いてきました。

DD：時代が進んで、エンジニアリング会社では、設計図面、作業工程表などのドキュメントは全て、ウィンドウズ95で作成していました。したがって図面は当然オートキャドでした。

EE：サンプルキャドの図面を開いてみました。何から手を付けて良いのか、当惑しましたが、この図面に慣れることから始めたのではないかと記憶しています。或る線を消してみる。それを復元してみる。どの範囲が消えたのか、次第に分かって来ました。線は色で識別されていますので、色を選択しなければなりません。プリントされない線種（デフポイント）もあります。「図面を消して、修復してみる」を繰り返せば、様々な疑問が出て来ました。この疑問を先生にぶつけて、知識を得て来ました

FF：当初二本の線を繋ぐことができませんでした。どんなに繰り返しても、ピッタリ線がくっついていないのです。端点コマンドを使うことを知らなかったのです。端点コマンドを使うことを知ったのは、先生の教えか、偶然知ったのか今は記憶が定かではありませんが、全てがこんな具合で基礎は全く出来ていませんでした。パソコンのソフトの習得も、読んでもさっぱり理解出来ず、全てがトライ・アンド・エラーで習得してきました

GG：ある時、図面にゴミ（本体図面より遥か彼方にオブジェクトがある）があるのを知りました。一つ消してもまだ残っているのです。これは「表示→ズーム→オブジェクト範囲」で画面上のゴミ拾いが出来ることも、かなり後から知りました

HH：オートキャドの図面は縮尺を選択しなくても良い。全てミリメートル単位での作成、表示で良い。定規も三角スケールも必要としない

II：オートキャドはパソコンのディスプレイの大きさが最大で、全体図は小さくなり、細部が見づらくなります。ドラフター図面は全体図を大きく描ける。私のレベルでは、印

刷もA3が最大でした。印刷後訂正箇所が分かり、訂正後再印刷となり、鉛筆と消しゴムと違い、印刷用紙が沢山使われました

JJ：或る時、車の骨格をキヤドで描きました。直線（ライン）で曲線を描きました。オブジェクトを大きく設定し、曲線は直線の折れ線で描きました。従ってオブジェクトを拡大すると、曲線は直線の繋がりで作られているのが分かりますが、何とか役目は果たしました

KK：私は図面を描くのが好きでしたので、お蔭さまでここまでやって来られました。手書きで、感光紙を使う湿式コピーの時代からオートキヤドでトナーを使うコピーの現在まで随分図面を描いてきました。今後も図面が描ければと願っています